

ふるさと霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第106号 (2015年3月)

風に吹かれて (84)

白井啓治

『躊躇って躊躇ってようように梅一輪』

毎年のように季節を追ってやって来る花だよりをあれこれ予想しながら、季節の笑顔を褒める、日本人の感性の豊かさは世界にも類を見ないだろうと思う。毎年のものであるが、春の笑顔を期待する思いが強い所為か、二三日暖かい陽射しが続くと、今年は梅の笑顔が早く褒められそうだとせつかに思い込んでしまう。

しかし、花の笑顔は未だ未だとはころばすことなく、見事に寒波を回避して適時に開いてくれる。今年も結局例年と同じ時に笑顔を見せてくれた。小さな庭であるが、その自然の営みを見ていると慌てず、急がず、思考の短絡もさせずに暮らして営んでいることに感動させられる。植物やトカゲ、昆虫たちに思考の短絡などとの表現は適切とは言えないだろうが、少なくともわれわれ人間様よりも間違いないことは確かである。

思考の短絡といえは、昨今のニュースに報じられる事件をみると、人間はいつからこんなにも思考の短絡を起こすようになってしまったのかと思う。

政治、経済、社会面など社会の全ての側面に短絡的現象が見られてならない。短絡とはもともと電氣用語であったのだが、思考の構成などあらゆるところに用いられるようになっており、随分と使い勝手の良い言葉である。とはいえ思考の短絡などの言葉は用いたくないものである。

話は変わるが、世の中を見回してみると、かつては大勢いた「○○バカ」と称せられる人の数がずいぶん減ってしまったようである。

釣りバカを始め、役者バカ、映画バカ、学者バカ等々、人間行動のあらゆる側面にバカが大勢いた。そして、この○○バカ達によってそれぞれの分野における進歩と呼べる創造がなされてきたと言える。一大発明や発見はこのバカの力で成し遂げられてきたと言える。しかし、今周りを見渡してみると何んとバカが居なくなってしまったことかと嘆かわしくなってくる。

その代りに唯のバカと小利口が増えてしまい世の中面白さにかけてきたように思う。本物の○○バカとは既成を破壊し、突飛でもないことを発想し、徹底してそれを行動に移そうとする。だから、周囲に多大な迷惑をかけたたり煩がられたりする。

しかしそれは仕方のないことなのである。何故ならバカの発想は「既成を突き破ること」なのだ

から。

二月十二日のこと。一人の映画バカが急逝した。黒潮物語を製作した小林一平、その人である。彼とは現役時代には接点がなかったのであるが、昨年弟子のプロデューサーの紹介で知りあった。

小林一平、彼は古い映画人であれば知っている劇場公開が絶たれた関川秀雄監督作品「ひろしま」(1955年ベルリン国際長編映画賞受賞)を今こそ観る時と、世界上映を目指し各地で上映会の立ち上げに尽くしてきた。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

映画「ひろしま」は、被爆した子供達の日記を教育学者・長田新が編集した文集「原爆の子」広島少年少女のうったえ」を日本教職員組合が映画化を企画し、八木保太郎が脚本に書き下ろし、関川秀雄が監督した作品である。この映画の撮影は、未だ原爆の傷跡の深く残る1953年に、広島市民9万人がエキストラ出演や制作に協力し完成にこぎつけた。しかし、当時の時代背景の中で、国際映画賞を受賞しながらも劇場での一般公開は出来なかった。

小林一平の父・大平がこの映画の監督補を務めたことから、息子一平が、『映画「ひろしま」に込められた想いが世界を変えていく奇跡への情熱となる』と所謂映画バカを買って出たのであった。

この映画を、戦後70年を迎える今年、ギター文化館でも70年イベントとして里山と風の声コンサートで上映しようということになり、8月9日・長崎原爆投下の日に行うこととなった。

二月十三日、ギター文化館の木下館長と、上映の打ち合わせをした午後、小林一平氏の急逝の連絡が入った。突然の訃報で些かショックを受けたが、シナリオ・ライターとして飯を喰って来た身であれば、小生としても、バカ的一端を担ぐのは責務であろうと、8月9日には予定通り里山と風の声コンサートに、「ひろしま」の上映会を行うことにした。

小林一平の言をかりると、「映画ひろしまは、国境や人種を越えて、被爆した子供達や広島・長崎市民の思いを届け、核廃絶と生命讃歌の情熱を伝える人間の遺産である」といえる。

映画「ひろしま」の上映は、茨城での数少ない友である美浦村の市川紀行氏も賛同し、美浦村で

の上映会を企画して頂いている。

核の問題は、兵器としての廃絶だけではない。平和利用であっても、放射線無害化技術の無い現在、原発も事故が起れば原爆投下と同じである。そのことを知るためには、先ずは広島・長崎の悲劇を映画「ひろしま」に学ぶ意味は大きい。

この映画「ひろしま」をぜひ多くの人達に見てもらい、目先の小さな利を喰うことにのみ思考を短絡させている時流を省みる機会をつくってもらうことを切に願うものである。

「自由」の裏に「不自由」

菅原茂美

「自由」こんな大切なものは、何事があっても手放すわけにはいかない。無ければ戦い取る他ないし、既に有るのなら命がけて守り通すべきもの。それが強い力によって、奪われるなど、想像するだけで、身の毛がよだつ。兎角この世は、誰かが「自由」なら、その裏で誰かが「不自由」に泣かされる例がよくみられる。

例えばスキー場で、踏み固めたグレンデよりも、裏側のバックカントリーが冒険心を煽り、人の知らない「自由」を楽しむのかもしれない。しかし、新雪雪崩が起きやすい超危険な場所だ。今冬も幾多の遭難事故が起き、救助隊は命がけだ。

人の勝手な楽しみのために、二次遭難もありうる救助に命をかける不合理さ。「自由」の追求は他人に迷惑をかけない事が第一原則だ。私も雪国生まれ故、冬山の怖さを知っている。

世の中、亭主関白の自由勝手に、その奥方が、

いかほど泣かされている事やら。そうは言っても女房の小春の犠牲的支えがあつてこそ、坂田三吉の快挙があつたとも言えるのだが…。

ともあれ、人類の繁栄の原動力は、フロンティアスピリッツ有つての事。進取の気概あればこそ文明深化とも言える。高山・深海・宇宙、そして芸術や文学。人のやらない新分野に飛び出さずして開拓も革命もありません。

*

戦時中「言論統制」など、私は幼かったから、明確な記憶はないが、おぼろげに身の周りに存在した事は覚えている。後に「蟹工船」で読んだ内容と重なっているかもしれないが、日本にも不幸な時代が、かつてあつた。たとえ命の叫びでも、高唱はできない。憲兵隊とかがきて、たちまち拘束されてしまう。官憲ほど大げさでなくとも、世間の風も冷たい。「物言えば唇寒し秋の風」。言わずもがなの余計な事をしゃべれば、思いがけない災いを招く事になる。イギリスの諺にも「口は閉じておけ、目は開けておけ」…と。

しかし、言うべきことをハッキリ言わないと、特に欧米人には、それを認めたものと受けとめられる。日本人にありがちな、遠慮してウヤムヤ・曖昧な態度は、何の得にもならない。

今、日本に関わる煩わしい難問は、従軍慰安婦問題。ある日本国内の有力新聞が、この件に関し、事実を反する記事を報道したために、日本は現在、世界から侮蔑的な眼差しで見られている。日本政府は、あきれ果てたせいか、その弁解さえしていないため、それを認めたように欧米では受け止めている。最近の報道によると、日本軍が、14〜20歳の従軍慰安婦、約20万人を強制連行し、天皇が

らの賜物として提供したとする教科書が、現在、米国で実際に使用されているという。韓国の宣伝を真に受けた米国5州（カリフォルニア・テネシー・ジョージア・ノースカロライナ・フロリダ）の推薦による教科書である。

日本では、沈黙は美德なり：とされてきたが、あまりにも事実反する事案に関しては、明確に反論すべきである。日本人は、ブラジルでのサッカーワールドカップ敗退後も、黙々として観客席の掃除をし、又、東日本大震災直後、商品略奪など無かつたとして、世界から尊敬の念で見られ、称賛された。

だからと言って、悪意で日本を陥れる報道には、アホらしくて反発する気にもなれない：という態度は、反論しないのだから事実なのであろう：と受け止められる。奥ゆかしさも結構だが、物によりけりで、言うべき所ははっきり言明すべきだ。

*

私はこの八年余、この会報で独善と偏見を顧みず、随分と勝手気ままに言いたい事を書きまくってきた。公務員を退職後、晴れて頭上の「重し」が取れた。誰に阿（おもね）る事もなし。長年の鬱憤を吹っ飛ばすごとく吠えまくった。しかし、心がけて身近の些事には触れなかった。その分、権威ある者には、随分と嘔みついた。国政を預かる者の近視眼的政策には、時々爆発。それを私は、パソコンが病気で：と称して「衆議院」とキーを叩けば「醜議院」とか「衆愚院」に、「代議士」を「大欺師」に。「霞が関」は「蚊棲みが堰」などとほざいたりした。私も農家の出身なので、よく言われる「農協・農民」を「脳狂・脳眠」などとは言わない。故に市政や県政など、身近なものにつ

いては言及をしなかった。その理由は、政治的色彩は私には全くないし、そんならお前がやってみる！と言われたら、そんな実力などありやしない。外野から大きな声で野次を飛ばすのは簡単であるが、易々とヒットは打てるものではない。

*

国連の紛争解決能力の無さには腹が立つ。世界中こんなにも紛争が多いのに、強力なイニシアチブを発揮しない。あたかも揉め事は当事者間で解決しろ：と言って逃げていように見える。

私に言わせれば、人類の文明も数千年の実績を重ねたのだから、もう少し進化していても良からうに：と常々思う。世界の至る所で、意地と意地とがぶつかり合い、激しいバトルを繰り返す。戦争のなかった時代など、探すのが容易じゃない。

奪い合い、己の自由な領域を拡大しようとするのが生き物の本性だ。即ち「縄張り争い」にすべてをかける。利己的な遺伝子の独壇場だ。我々は原始の生命が、そうして生き残ったその子孫である。ある種のクラゲは、自分より小さな仲間なら、抱え込んで飲み込むという。いわゆる共食いである。生命活動とは、周りから栄養を奪って、成長し、子孫にその命を繋ぐ。植物だって、小さな虫だって、そして大型の動物だって命がけで、己の領分を守る縄張り争いが生き物の実態だ。「自由」の確保。これぞ生き物の本性だ。

ま、そう言ってしまうえばそれまでだけど、人類は折角大脳を膨らませたのだから、もつと穏やかな、理想郷を実現できても良からうに：と思う。これほどに文明が進歩したのだから、数千年経ってなお、明けても暮れても争いの連続では、「万物の霊長」という看板はとっくに下ろすべきである。

そこで考えられるのは、小さな国が、国民の生活を犠牲にしてまでも、莫大な軍事費を投じ、赤字財政で四苦八苦。パンを節約し、銃弾を買う。こんなのにナンセンスの極み。

【私が駐在した中米のある国では、小6が義務教育だが、卒業できるのはその半数とか。子供は靴磨き、果物売り等で家計を助けるために学校へ行けない。国道の舗装は一部のみ。熱帯のスコールでいくら補修しても穴だらけ。国道なのだから国はしっかり道路を整備しろ！と政府に文句を言うのと、「穴に落っこちて死ぬ奴はバカ！」と相手にしてくれない。国営の発電所は、十分燃料が買えないため、しょっちゅう停電。それなのに空には戦闘機が毎日ブンブン。巨大な先進国が、型の古い武器を無理やり押し付けてくる。隣国同士を仲違いさせ、武器を売って暮らす「大尺殿」がいてござる。現在、日本は、中韓と仲違い。これぞ、武器商人にとって、千載一遇のチャンス？！】

そこで世界は叡智を結集して、国連など強大な機関を造り、絶対的な軍事組織を持ち、世界のどんな片隅にでも出かけ、揉め事があれば一気にこれを裁く。そしてならず者が秘かに軍備を整えるのを未然に防いで、紛争の芽を早めに摘み取る。

更に各国は、一切軍備を持つ事は禁止。勿論、現在、世界8か国が保有する23,000発の核兵器など、直ちに全てを廃棄。各国が軍事費に莫大な予算を浪費しなければ、教育・福祉・芸術等に、いかほど傾注できる事か。各国は、国連に睨まれながら自分の器量に応じ、国政を運営する：これも、いささか窮屈ではあるが、大の「自由」を手にする為には、小の「不自由」も我慢すべきものかもしれない。

*

さて「自由」貿易協定とかいって、未熟な国の産業を脅かす先進大国がある。被害者にとつて、真に「不自由」な話である。環太平洋経済連携協定(TPP)で、日本は別枠の世界貿易機関(WTO)のルールにより、一定量の外国産米をミニマムアクセスで、無関税輸入を強いられている。その量は年間77万ト。その中、米国から36万トの輸入を義務付けられている。大国の横暴だ。それ自体腑に落ちない話なのに、更にTPPの大詰めの交渉で、主食用米、数万トの輸入を押し付けられそうである。多分この原稿が印刷される頃は、そういう決定が新聞に載る事と思う。日本の主食用米800万トのうち、10%以上を無理やり輸入米で占められそう。米が余っているというのに。日本は減反政策にかかほど多額の経費を投じてきたか？それが、大国の「自由」貿易の旗の下に、小国は、莫大な「不自由」を背負わされている。農家がなくなり、田舎の自治体が消滅の危機にある。大国の余剰米を、生産基盤の整わない国に、無理やり押し付ける「不自由」さ。そのため、日本が仲良くしていかうとしているタイなど東南アジアからのコメ輸入を、当然減らさなければならぬ。大国の横暴が弱小国を踏みにする。

5%の関税をかけているが、これも15年以内に10%まで関税を下げると強力な圧力。アメリカの「自由貿易維持」のため、11か国がTPPで泣き面に蜂である。大国の横暴を許してはいけない。ヨーロッパ列強は、米大陸で己の欲望を満たすために、先住民を徹底的(90%)に殺害し、土地や財産を奪い、侵略したように、今でも他国を凌駕し世界に自分達だけが生き残ればよいとする風潮が依然として残っている。日本は戦争に負け、安全保障条約で国土を守ってもらおうという立場から、何でも言うことを聞かざるを得ず、TPPで封じ込められ、特に弱い農家が泣かされている。

*

言論の「自由」を堅持するため、過日フランスで、37万人ものデモが行われた。フランスの政治週刊紙シャルリー・エブトがイスラム教の預言者ムハンマドを風刺漫画で皮肉つたら、過激なイスラム教徒が、侮辱に対する反撃として発行社を襲い、編集者や記者など17人を自動小銃で殺害した。また米国でソニーの関連会社が、北朝鮮の金正恩をもじった映画に対し、猛烈なサイバー攻撃がみられた。映画館は攻撃を恐れ、一応上映を見合わせた。しかし、言論の自由を守るため、敗北するわけにはいかぬとして、次々上映を開始した。こうしてみると、度を越した他国批判は、相手がどんな非常識の国でも、ある程度の制限を加えないと、猛烈な反撃行為で襲いかかる。

教も神教も仲良く国民に浸透していた。ところが天皇を神格化して、戦争に駆り立てた一部軍部により、神教重視のあまり仏教を廃し、路傍の石仏の首を切り落とした偏狭な現象等見られた。なんたる残忍さか。

宗教の信者は、当然自分達のものだけが絶対で、他は意味をなさないとする傾向もみられる。原理主義ほどの宗教でも同じ事。ならば、それぞれが自分達のもを固く守り通せばよいのであって、他は邪教として攻撃する態度は狭量過ぎる。

他は他で、それでよいではないか。なぜ他も自分に靡(なび)かせねばならないのか。ここにも人間の本能が顔を出す。いわゆる「縄張り争い」である。人間の悲しき「性(さが)」である。

従って「自由」とは、他を陥れ、自分達だけ思いのままに振る舞えばよいというものではない。自分の自由の陰には、不自由を強いられる人もいるという事を忘れてはならない。マスコミなど、特に有名人のプライバシーを、面白おかしく書きたて、甚だしく人権を侵害する傾向が多く見られる。いわば商業主義で、自分の金儲けのために人をコケにする輩が、むやみやたら多すぎる。

*

人間の自由を剥奪する最たるものは、「拉致」や「誘拐」であろう。北朝鮮による拉致問題に関しては、そこまで悪辣なことをするのか…とただただ呆れるばかりである。将来の侵略に備えてか、他国の庶民を拉致誘拐し、工作員として備えて置く周到な陰謀である。年老いた被害者の嘆きを見るにつけ、何としても早く解決してほしいもの。

更に人口3万人の疑似国「イスラム国」による日本人質の殺害事件は、言語に絶する。その成

り立ちは、大量破壊兵器ありとしてブッシュが、イラクを潰した（実際、大量破壊兵器は存在しなかった。その潰された兵士等の生き残りが、カリフ（預言者の後継者）バグダディーを首領として、世界中から賛同者を集め組織されているらしい。近隣諸国は、将来イスラム国の「州」にするのだという。サウジアラビア州・エジプト州・ヨルダン州・イラン州等。日本に対し、確かに敵方を支援する者は、敵かもしれない。同じ中東民族の難民のための食料・医療等の人道支援で、有志国による爆撃など軍事支援ではない。それなのに日本を真っ向から敵視するとは、なんたる理屈？

現在、海外在留邦人126万人、出国する日本人年間1747万人。何時、どこでどんな災害に遭遇するかもしれない。特に平和ボケしている日本人は防備意識が希薄である。世界の殆どの国に現在狂犬病が存在する。旅行会社に「大丈夫」と言われ、予防注射もせずにノコノコ出かける軽率さ。そして世界の歴史上最悪の拉致事件は、アメリカが行ったアフリカからの黒人拉致事件である。アメリカ原住民の生命財産を奪った挙句、更に平和に暮らしていたアフリカの原住民を拉致拘束。白人どもは、己の利益のために黒人を奴隷としてこき使った。しかも牛馬のごとく、人間を市場のセリにかけて売買した。最悪の人権侵害だ。

*

アマゾンやボルネオの裸族は、今なお石器時代の狩猟採集の生活をしている。我々文明人より、はるかに地球に優しい生活だ。おおらかで、くよくよせず、何の羞恥もなく天真爛漫。他を傷つける事なく、有り余るほどの自由を満喫している。これに対し先進国では、ろくでもない文明の機

器を縦横に駆使し、地球環境を破壊し、危険な化学物質をバラマキ、絶滅危惧種を増やしている。しかも、経済優先で、労働者は過酷な労働を強いられ、過労死するまで自由を奪われている。

一体両者はどちらが幸せか？ 私はラテンアメリカの人々の生活をしみじみ見てきたが、経済的に豊かではないにしろ、彼等の底抜けの明るさ。おおらかさ。先進国労働者の成果主義にとらわれた悲惨な生活。この惨めな姿を見るにつけ、貧乏でも心にゆとりある、のびのびした途上国の人々の暮らしに、私は軍配を挙げたい。

頭白上人と常陸国

木村 進

日本人は先祖をたどると源氏が平氏のどちらかになるなどといわれるが本当はどうかはわからない。昔石岡に越してきた頃に、あなたはどちらですか？などと聞かれたことがあった。

まあ現代においては、こんなことはどちらでもよいのであるが、どうも鎌倉時代以降は誰もが源氏だと思いたがった様である。「いざ鎌倉」などといって関東の武士たるものは鎌倉幕府に忠誠を誓うことが美徳と思われた。

江戸時代になってからも徳川家康は自ら源氏一族だと名のつたとされ、これも源氏でないと將軍となれないという雰囲気もあったようだが、これとて当てにはならない。

家康が源氏だと名のつたので、各地の大名たちも我も我もと皆先祖は源氏となっていた。私の住んでいる石岡は桓武平氏の系統の大掾氏

が長い間支配していたので平氏のほうが優勢だが、戦国時代に常陸国を統一した佐竹氏は源氏の直系で、清和源氏新羅三郎義光の長男の家系である。次男は甲斐の武田氏となった。

まあ私は次男だし、親も次男で本家とは全く無縁なのだが、本家では家系図なるものを持ち出し当家は何百年も続いた家だとか何とか言っていたが、私にとっては右の耳から入って左に抜けてしまつてちつとも頭に残っていない。今なら少し歴史も興味があるので記憶にも残っているのだろうが、昔は全く馬の耳に念仏状態であった。

家系にあまり興味がなく家に縛られることもないため、自由に考えられることは良いが、最近よく読まれているというトマ・ピケティの「21世紀の資本」ではいくら働いても働いた収益率では所得が元々ある人の収益などには追いつけないようだ。サラリーマンでは子供の教育費と家のローンで一生は終わりなのかもしれないが、家を継ぐとなればまたそれで別な苦勞が伴うのでどちらが良いなどとは言えない。

先々月号の菅原兄が書かれた「駕籠かき家業」の話が妙に頭に残ってしまった。・・・前棒を女房が、後棒を亭主が担ぐ。前棒をいたわり、後棒は駕籠に近い部位を担ぐ。肩は腫れ上がり、脚はくたくた、倒れる寸前。しかし脇目も振らずこれぞ天命と覚悟し、全てをかけて走り続ける。駕籠に載せているのは子供。そして子供がまた駕籠を担ぐようになれば親はもう要は無い？？まあこんなものかもしれないが、亡くなった坂東三津五郎のように子供に自分の芸や経験を伝える伝統の継続が大切なのだが、その才能もないのはいまさらどうしようもない。

さてまた、戦国武将の間ではこの源氏や平家と
いったものではなく、自分は〇〇の生まれ変わり
であると称したのも多くいたという。まあもつ
とも自分で言ったのか周りから言われていい気
になってたのかは知らぬが、できるだけ自分を大
きく見せておく必要はあったであろう。例えば越
後の上杉謙信は「毘沙門天」を信仰し自らその生
まれ変わりと称した。また織田信長は「大六天（第
六天）魔王」と称したとも言われる。この大六天
は神仏融合の象徴のようであり、明治の廃仏毀釈
で多くが陰に隠れてしまったようだ。しかし千葉
や茨城南東部などにもこの第六天に関係する神社
をときどき見かけるのでこれもまた興味がある。
さて、常陸国を統一した「佐竹義宣」にも頭白上
人の生まれ変わりであると称したとする逸話があ
る。この頭白（すはく）上人だが土浦市小高（旧新治
村）に頭白上人が母親の供養のために建立したと
される五輪塔がある。場所は小町の里から小田・
北条の方に少し行った金嶽神社の入り口にあり隣
は筑波の石の採石場があるところだ。私もこの「風
」の会報を毎月、小町の里と北条に持って行って
るのでこの横を通っている。

関東でも最大級とも思われるこの大きな石の五
輪塔は地輪に「功德主 頭白上人 大工本郷 永
正十二年 二月三日」と刻まれている。永正十二
は西暦一五一六年であり、伝えによれば千部経を
あげて七日間母親の供養を行ったと伝えられて
いる。この頭白上人は天台宗の高僧で、生まれた時
から頭が白かったので頭白上人と呼ばれていたさ
れているが、この生まれに関しては「飴玉幽霊」
とか「お団子幽霊」「子育て幽霊」などとして日本
でも各地に伝わる話の主でもある。墓場に埋めら

れた死んだ臨月の母親が墓の中で赤ん坊を産み、
幽霊となって冥途の駄賃として置かれた六文銭を
使って毎晩飴や団子を買いに現れる。不審に思っ
て墓を掘ると赤ん坊がいて、助けられ寺に預けら
れてそののち有名な高僧となったというものであ
る。しかし頭白上人お話では、母親は家を飛び出
して逃げ込んだ荒れ寺で悪党に襲われて殺された
という話もある。

佐竹義宣がこの頭白上人の生まれ変わりと称し
たとされるのはまた別な話も加わってくる。佐
竹義宣の父は鬼將軍と呼ばれた佐竹義重で、最大
の敵はこの地方に勢力を張っていた小田氏であっ
た。この頭白上人がこの地の辻で布教をしていた
ときに鷹狩りに来た小田政治の一行が通りかかっ
た。騎乗したままで集まった人々を蹴散らして行
ったのに腹を立てた頭白が政治に向かって「馬か
ら降りず礼をも知らぬ武將は天下の愚将である」
といったとかで、腹を立てた政治がそこにいた者
たちを皆切り伏せてしまったという。これもこの
母親の供養の時であったと云話もあり、このよう
な話あまり信憑性があるとも思えないが、長年
の敵であった小田氏を滅ぼしたのはこの頭白上人
の怨念が成し遂げさせたものという箔付け話と
も考えておけばよいだろう。この頭白上人が常陸
太田の近くの生まれかどうかはわからないが、東
海村にある日本三大虚空蔵といわれる「村松山虚
空蔵」の縁起によれば、弘法大師が創建したとき
されるこの寺を平安末期から500年間佐竹氏が保
護し繁栄させてきたが文明十七年（1485）に本
尊を残して兵火で焼失してしまった。それを頭白
上人が2年後の1487年に再建したとある。こ
れは五輪塔建立よりも29年前となる。この村松虚

空蔵堂は十三参りでも有名で筑波山から見れば東
北の鬼門にあたる。

もう一か所名前前の出てくる場所が千葉県の香取
市にある。佐原と旧八日市（匝瑳市）を結ぶ千葉県
道16号線（佐原八日市線）沿いに「頭白上人塚」とい
う史跡が残されている。ここは香取神宮の摂社の
一つである「返田（かえだ）神社」の近くで、西蔵
院という寺が管理している小山（塚）である。この
塚の一番上に「文明十八年（1486）銘の下総板
碑が置かれており、ここで西蔵院五代目住職であ
った頭白上人が疫病や災いが続いた人々の苦しみ
を救うために入定して即身仏となったと言いつ
えられている。板碑の時期と入定した時期が同じと
は限らないので同じ頭白上人であったと言えない
こともないが、言い伝えでは入定したのはその三
年前という話もあるので同じように頭の髪が真っ
白な僧侶が別にいたと考えるべきかもしれない。
ただこのあたりも大和朝廷の進出してきた時代を
調べていると不思議な地域です。元々いた物部族
であった山根一族（この場所は山根という）がこの地に
進出してきた侵略者である出雲族の儀式を拒否し
たために手を切られたという言い伝えが残されて
いる「切手神社」が近くにある。このように謎め
いている事柄は想像力をかきたてられて結構面白
いものだ。茨城から香取の方に行くときあまりにも
出雲系である諏訪神社（大神）という名前の神社が
多くて驚かされます。

さて、生まれ変わりの話でもう一つ。伊達政宗
が独眼竜ということもあって「満海上人」の生ま
れ変わりだと言われ、聖観音菩薩を守護本尊とし
ていたそうです。先日行方市の小畑観音寺を訪れ
て、この満海上人の名前を見つけました。この観

音寺は大同3年(808)に大宰府観音寺から満海上人が分霊を奉祀し、その後、忍性が文応元年(1260)再興したと書かれている。満海上人は仙台の寺に墓もあり、政宗も同じ場所に眠っているようです。さて忍性はらい病施設である十八間戸を建てたことで有名だが、先に書いた小田氏に招かれて三村山清冷院極楽寺に10年ほど滞在して東国の布教に努めたといわれています。この極楽寺は相当大きな寺(律宗)だったようですが今はなく、宝篋山の麓にあったそうで、ハイキングコースにその名前を残しています。こんなことを考えながら春になったら宝篋山でもハイキングしたいと思う。

さて話は最初に戻って、生まれ変わりや先祖がどこの馬の骨かもわからない者でも、今日を精一杯生きて、先の世に子孫をつなぐ役割のDNAを受け渡していく「駕籠かき家業」の一つの駒であるわけで、書いたものを残すのも一つの手法であり、書いたものなどなくても子供は親の背中を見て育つと信じ、子供に恥ずかしくない程度の行いをする事しかないのだろう。

山岡鉄舟の言葉に次のようなものがある。

- ・金を積んでもって子孫に遺す。
- ・子孫いまだ必ずしも守らず。
- ・書を積んでもって子孫に遺す。
- ・子孫いまだ必ずしも読まず。
- ・陰徳を冥々の中に積むにしかず。
- ・もって子孫長久の計となす。

子孫に金や書物を残しても必ずしもこれを守り、

発展させてくれるものとは限らない。子孫繁栄を願うなら人に知れることがないと思っても日々周りの人びとに徳を積む行いを続けることだ。そうすれば子孫も周りの人々から慕われ末永く繁栄すると教えています。勝海舟と徳川慶喜の志を受けて、わずか一人の供だけを連れて駿府の西郷隆盛に直談判したのです。その結果、勝海舟と西郷隆盛との会談が行われ江戸を戦火から守った陰の立役者でもある山岡鉄舟ですので、言葉にも重みがある。石岡の高浜神社には鉄舟の書いた扁額が掛けられているが、高浜小学校の初代校長は山岡鉄舟の兄・小野古風だ。

小漁場(こりょうば)を行く

伊東弓子

今回で、玉里地区を一回りしたことになる。計画時には締めていこう、という気持ちで取り組んだ。集合場所が分かりにくかったらしく問い合わせが多かったが、電話での会話で心通わすことが出来てよかった。

小漁場(御見捨之場所)は、玉里御留川の北西の奥の場所で高崎村、高浜村、三村、石川村に面している。二百年前の絵図によると、水が引いた広い場所が、山王川を挟んで広がっている。ジャリ千、田、ヤハラ、新田、田面、田圃等と記されている。川境には芦、蒲が群生している。漁場の少ない石川村と高崎村の為に確保された漁場だったが、そこは地元の力、漁民の意思表示の現われが確りとあつたことがわかる。

歩く場所が、二回めと一部重なっているが、心

配はなかった。新しい参加者が地元の役員の話しに耳を傾けてくれていた。私も口を挟んでつい遅れぎみになったりすると友がせきたててくれた。高崎村絵図を手に、二百年前の高崎村の人々の生活を描きながら歩いている中ふっと思い出したことがある。「戦国時代は六軒しかなかったよ。高崎には。その一軒が俺の家なんだ。」と言ってたお爺さん、今はどうしているんだろう。

鉾の宮の入口で鳥居と江間の図を見た。高崎村の人達の名を刻んである水神様を見、名前を確かめた。

江間の出入口に建って漁民の安全を願い、豊漁を祈った鳥居の姿はない。壊れてしまった一部を見てもらった。そこで上、下高崎の二十五年度と二十六年年度の区長、常会長さんの協力で水の中から地上に取り上げて頂いた話をし、説明書などを添えたことを話した。散歩や魚釣りでここを通る人の目に止まることを願っていると加えた。

江島道を進むことにした。「高崎入口」という辺りで台の区切れる所がある。高浜〜高崎に県道を造った時、土が必要な為崩した所だ。昭和の始めの頃だから今は木が茂り、草々も裸の大地を覆ってしまう程だ。時の流れを思う。

亀井(玉里六井の一つ)で休憩にした。道に沿ってあった谷津田も今は工場やアパートが建っている。坂の上は大きな工場地帯が続く。推して知るべし亀井の水は涸れる運命だったのだ。現実はどうあれ、暫し悠久の昔に思いを馳せたひとときだった。亀井の台の奥に富士峰古墳(玉里八艘の一つ)がある。二十代の時通った道は細く、松風の音が耳に涼しかったことや、古墳を壊す時呪わしい事故が

続いたことなどを話した。

すぐ上に富士峰館（玉里人艘の二）が聳えていた筈だ。高浜、三村、石川、高崎の各館と戦国の世を生き続けた人々の声も今は消え、竹の軋む音に変わっている。

富士峰台の奥には、右に市街道、円妙寺海道の古道に続き、左に江島道、江島三角、五万掘など古い地名を伝える場所がある。

突き当りには勤王志士二人の名の刻まれた碑がある。

孫がおなかにいる時、富士峰の台から嫁さんと一緒に富士山を見たことがあった。西風を受けて西に富士山、北西に筑波の姿、きつと古代人も崇拜したことだろう。そして産れて来る孫もここで歴史を刻んでいくことだろうと思う。

歩き出すとすぐ谷津田がある。この奥に「小池」がある。二十年前浜田先生が調べてくださったことがあった。人家から離れていることもあって水はきれいだったが、釣針、釣竿が池に捨てられていた。楽しんだ後の始末の出来ない人間の勝手さに興慨したことを覚えていて。そんな愚痴を零しながら古道を歩いて行った。

左右対称にこんもりした森があつて、真中に人道、荷車の通れる登り坂があつた。子育ての頃、子供を連れ高浜へ行き、帰りのお気にいりの道だった。右の森は瓦崖と地元の人がよんでいた。古代人の土器があつたときいている。左の森の奥には高崎のある家（三軒）の先祖が住んでいた所だと聞いた。今でも年に一回三軒でまつりをするといっていた。この森は縄文時代の樹木が森を護っている。右の森は霞ヶ浦護岸工事の為大幅に失われてしまい、材木会社が屑を燃やしている煙が出て

いる。ふり向いた眼下には広い流れ海が波打っていたらう情景を偲ばれる。水が引いて絵図に表れた地域の一部になり、現在は水田地帯となった。

二百メートル位先にある「道しるべ」が物語るように、この古道は多く人の歩いた道だ。府中からの人、高浜で船を降りた人が、成田山、鹿島へ行く人が、沢山の思いを胸に急いだことだろう。雄大なこの景色の中で、どんなにか体も心も癒されたことだろうかと、隣りの人と語りながら行く。

「大池」に続く谷津がある。大池に住んでいた男の龍がここをのたくりながら流れ海に行つたという。以前は大池も谷津田も流れ海と同じ様に水を湛えていたのだから、水が引くにつれ、龍も苦労しただろう。塵処理場、白雲荘、人家も多くなり、木々が少なくなった今の状況では男龍も死んでしまったことだろうと哀しさを思い、人の罪をも思う。

竜王とよばれる一角も変つた。三十年代には高台に石岡青年の家があつたが、青春の思い出も台地もなくなつてしまった。

ボタンの会社も人が去り、建物も取り壊され、夫や同僚の苦労も消えていった。

田中村、高浜村、高崎村の境に出た。梅林のあつた畑を中心に土が盛られ、山王川の源流は細くなつていく。あちこちに道が出来ているが便利さからだろうか。この道はどっちへ向かつて行くのだろうか。

うし塚は壊されていなかった。ああ！よかつた。思わず胸を撫で下ろした。

高浜町に出る。旧道を歩いて行く。昭和三十年代「あけぼの幼稚園」があつたことを覚えている。レンガ造りの壁も看板ももうなかった。

ギター文化館

2015 CONCERT SERIES

- 3月22日(日) ウーマン・オブ・ザ・ワールド
- 4月5日(日) 大萩康一&小沼ようすけ
- 5月3日(日) ギター文化館所蔵名器コンサート
- 5月30日(土) 國松竜次ギターリサイタル
- 6月14日(日) 高橋竹童津軽三味線コンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

三十年前に手掛けられた道がやっと去年完成した。その道路を渡って堤防に出た。

今霞ヶ浦に突き出ている水田は、堤防に囲まれて何の心配もないのだろう。

絵図の中で御留川に出た恋瀬川は両脇に豊かな土を貯え芦や蒲を育て魚の棲家を作っていた。そんな突端に「大川崎」(玉里御留川①)漁場があった。春の歩く会には行く予定だ。「向う場の川の中に田圃があるんだ。親と一緒に仕事に行く」と、中学校の頃友が言っていた。

「川の中の田に稲刈りに行く」と、四十年頃嫁に来た友が言っていた。

「子供心に高崎の人の力って凄いと思ったよ」稲束を背負い小舟まで運んで積んでいた。三十年代の頃だったと石川の人の話を聞いた。

「鉾の宮」から「境堂」に線をひいて、この範囲の中で自由な漁は高崎村と石川村の漁民に許された所だったが、違反をしたり、争いも多く、境のことなどからも両村の漁師の生きていく強い姿を読みとれる。

山王川添いに水草が生え、木々も育っているが妹の檀那が記録を取ったり、写真で変化をみたり、水草、水の中の清掃をしたりしていることを思い、一人一人の積み上げを大切に思う。

玉里の台地が流れ海に突き出ているので「出船」とよんだという。高浜台地は高浜入江に着いた「入船」とよんだという。幼い頃聞いた呼び名を、この地に立って改めて実感している私だったが、四キロも歩いたこの地が、五、六十年で変わっていることに驚いた。又明日は何かが変わっていくの

第九回 いしおか雛巡り

兼平智恵子

改修中の石岡駅を出ると西に向かって真っ直ぐの御幸通りが広がります。その奥には筑波山連山の一部が皆さんのお越をお待ちしているかのよう

歴史絵巻情景飾りのご紹介をしましょう。主人公は絶世の美女とうたわれている、また古代エジプトのクレオパトラや、古代中国の楊貴妃とともに世界三大美女の一人とも言われている小野小町でした。

に迎えてくれます。そして右側に目を移すと野外に飾られた1m超える大きな、女雛、男雛が目に入ります。

小町に関しては秋田県湯沢市小野で生れたという説等日本全国にさまざまな説がある中で土浦市小野地区にある小町の墓や、石岡市八郷地区にある北向観音へのお参り説など身近なところにも語り告げられています。

今年も昨年同様九十軒の参加店で石岡市中心市街地商店街にて、いしおか雛巡りが二月十四、十五日三日まで開催されました。恒例になりました、うたい文句「ここにくれば『ただいま』と言えるあたたかなまち石岡。おかえりなさい。いしおか店舗内に飾られた華やかなひなさまをガラス越しに見ながら、落ち着いた街並みが続きます。

「言の葉の旅」と題して三情景がお馴染みの守護神の龍を中心に展示されてあります。最初の情景は宮中で披露される「五節の舞」(公家や国司の家から選ばれた未婚の美しい娘五人が踊る舞楽のこと)が今行われようとしています。この中に後世にも伝えられる美しさを披露したのが、小野小町だったと言われ小町は、その後、天皇に愛され女官として入内し、仁明天皇の更衣となりました。

石岡のおまつりで華やかさを添える山車人形も登場です。おすましの昭和のひなさまに比べ明治十四、二十年のひなさまは、目線を下げ、見上げるようにすると微笑みかけ、話しかけてくるような親しみが感じられます(これは明治二十年のひなさまを飾る店主さんのおすすめ見方でした)。

また仁明天皇に蔵人頭として仕え寵愛をうけていた吉峯宗貞(よしみねのむねさだ)は深草少将とも呼ばれ小野小町に恋する男として「大和物語」に登場し、才人として誉れ高い深草少将と当代第一の美女小野小町の恋のエピソードとしての「深草少将の百夜通い」が二番目の情景ですが、百夜通いで亡くなったとされている少将は、ひな様達とは一日で100回目というその日、小町の住む里は大雪が降り少将の行く手を大きく阻んだ情景が演じられていました。

今年の八月に一部完成予定の石岡駅模型とひなさま達。象牙作家の木彫り作品とひなさま達。静岡地方の一部では、ひなまつりの時に男の子のおひなさま様として学問の神と崇められている菅原道真公にあやかっ

として第三の情景として、その後時が経ち出家して僧正遍昭となった深草少将はある寺で小野小町と遭遇する機会が訪れ、大人になったふたりはある種同志であるような親交を続け、二人とも紀

貫之によって優れた歌人として六歌仙にえらばれました。

昨年、平景清物語を演じていたひな様達は情報センターの職員の方々によって雅な平安の世を演じきっていました。

花の色は移りにけりないたづらに

わが身世にふるながめせし間に

小野小町

あまつ風雲のかよひ路ふきとぢよ
をとめの姿しばしとどめむ

僧正遍昭

小町は僧正遍昭とのロマンスに浸る一方、六歌仙の仲間である在原業平には小町の方が恋をしていたという説もあり、この歌は業平にあてた恋歌であるという説もあり僧正遍昭、小野小町、在原業平は平安の人々の想いを和歌の形で後世に伝え残した事で今も日本人の中に永遠に生き続けることとなったのです。一三〇〇年という時間が経過しても美学が残るということを逆説的に証明したすばらしい和歌が「はなのいろは…」の歌なのです。その歌は今の私たちにも平安時代からのメッセージというけとめることができ、小野小町の心もちに共感することができるところから、和歌とは本当に豊かな芸術です。

「言の葉の旅」ROKASEN二〇一五

製作 石岡市まちかど情報センターより

今年も職員皆さんの発想、穏やかな、そして雅な演出に感動しました。さぞひな様達もご満悦の事だったことでしょう。職員の皆さん、商店街の皆さんお疲れさまでございました。

このところ、凶悪な事件が続いていますお子さんの健やかな成長を心より願いつつ。

・あっちにほっくり こっちにほっくり

香り高きいのち頂きまあす 智恵子

水戸偕楽園

小林幸枝

日本三名園と言われている水戸の偕楽園では、毎年二月下旬から三月下旬にかけて梅まつりが開催されます。私には余りにも身近な庭園だったので改めて詳しく知ろうとは思わなかったのですが、ちよつと気になってその歴史を調べてみた。

偕楽園は、水戸徳川版第9代藩主徳川斉昭(1800~1860)が自ら造園構想を練って、造られたもので特に好文亭は斉昭がその場所や設計を定めたとされています。

計画は斉昭が藩主になってから後、はじめて水戸に来た天保4年(1833)に考えられたのですが、この年は大飢饉の年であったことから、翌年の天保5年からその第一歩として神崎の池に多くの梅の木を植えさせたのですが、この頃はまだ具体的な庭園の構想は出来上がってはいなかったといえます。

天保12年(1841)4月から造園工事が始まり翌年7月に開園となり、公開されました。最初は武家や神官、僧侶などしか入園できませんでした。次第に庶民一般にも開放されるようになりました。

偕楽園の由来や好文亭に関する事などについては「偕楽園記」に書かれています。偕楽園の名称は、中国の古典「孟子」にある『古の人は民と偕

(と)に楽しむ、故に能く楽しむなり』という一節からとったもので偕楽記では「是れ余(斉昭)が衆と楽しみと同じくするの意なり」と書かれています。

偕楽園は、先の東日本大震災で崩落や液状化などの被害を受けましたが、今では完全復旧しています。

偕楽園というと好文亭からの眺めが有名ですが、好文亭には二階に人や料理を上るための手動式のエレベーターがあります。一階から二階へ正方形の通し穴があり、そこに箱型のゴンドラが吊るされています。これは斉昭の発明と言われており、日本初のエレベーターです。

普段はあまりにも身近な偕楽園なので深く気にかけていませんでしたが、一寸資料を調べてみると色々面白くあることに驚かされます。

【風の談話室】

今月もまた嬉しい、当会の新しい友からの投稿を頂いた。当会も、5月で丸9年となり、6月からはいよいよ10年目に入ることになる。大きな歩みはなかったが、確実に前に進んでいることを自慢に思うべきである。

《読者投稿》

たちばな伝説

京都府精華町 今井 直

二千二百年ほど前、中国では秦の始皇帝の意のままの天下であった。始皇帝は東方海上の島(日本)に不老不死の霊薬があると知り、これを探し出して手に入れるよう徐福を派遣した。わが国に

渡来した徐福は、靈薬を見つけることは叶わなかったが、風光明媚で温暖な気候、住民の温かい人情に触れ、ついに帰国を断念しこの地を永住の地と定めたと言う。今も佐賀県や和歌山県などに伝わる徐福伝説がある。

わが国にもそれと似た話が『記紀』に書かれている。ある時、垂仁(すいにん)天皇(日本武尊の祖父)が、常世国(とよのくに)にある不老長寿の妙薬を手に入れたいと仰せになった。それは「非時香菓(ときじくのかぐのみ)」と呼ばれる果実で、常世国へは海を渡らねばならない。大役を任されたのは、大陸の事情に明るい田道間守(たじまもり)であった。田道間守は、必ず持ち帰ると強い決意で旅立った。そして唐(から)や天竺をあらちちらと訪ね歩いたが見つからず、とうとう十年の歳月が流れてしまった。

ある日、田道間守は辺鄙な山村で奇妙な場面に出くわした。それは杖にすがった爺さんが十代半ばの小娘に叱られ泣いているところだった。話を聞いてみると、実はその老人はこの若い娘が70年前に産んだ息子であるという。母親である小娘は、田道間守に黄色い小さな果実を見せて、「この実は苦くて酸っぱいからと、この子はどうしても食べようとせん。だから、こんなに年をとってしまつて・・・」と嘆いた。

娘が言うには、この果樹は春になると香りの高い純白の小さな五弁の花を咲かせる。やがて緑色の実を結び、秋には熟して黄色くなる。いつまでも爽やかな香りが消えない果実で、「非時香菓(ときじくのかぐのみ)」と呼ばれると。

ついに非時香菓を見つけた田道間守は、喜び勇んで大和に持ち帰った。しかし、垂仁天皇はすでに

に崩御された後だった。田道間守は天を仰いで泣き叫び、不老長寿の実を御陵に捧げ、職を絶つて殉死したという。

田道間守が持ち帰った果実なので田道間花(たまはな)と呼ばれていたが、後に省略されて「タチバナ」となり「橘」と書くようになった。果実は酸味と苦味が強すぎてそのままでは食用にはならないが、香りがよいので今では皮を和え物や菓子などに用いられる。それで田道間守は菓祖(お菓子の神様)とされている。

垂仁陵は、奈良・西の京の唐招提寺にほど近い所にあり、全長227mの巨大な前方後円墳である。満々と水をたたえたその周濠の中に、陵(みさき)に寄り添うように小さな島が浮かんでいる。これが田道間守が持ち帰った橘の実を植えたことに由来する。寺伝では、元々、太子の祖父・欽明天皇や父・用明天皇の離宮があった場所で、太子はこの「橘の宮」で生まれ、子供時代を過ごしたという。

常緑樹の橘は、時を選ばず芳しく美しく生い茂るので、長寿瑞祥(すいしょう)の樹として重用された。京都御所の紫宸殿前に植えられている「右近の橘」は、この故事に因る。奈良では、興福寺南円堂の右近の橘が見事で、これを目当てに訪れる人も多い。橘は桃の節句のひな飾りに欠かせないし、また、文化勲章のデザインに昭和天皇が橘を選ばれたと聞く。

同じ柑橘類に「カラタチ」がある。「唐橘(からたちばな)」が「カラタチ」になったそう。カラタチは、鋭い棘があることからよ者の侵入を防ぐ効果があり、かつては生垣によく使われた。「駅から続くからたちの小径を」とは、島倉千代子の最

後の歌の一節だが、二人して「手をつなぎ寄り添って」歩けば、「トゲのあることすらも忘れてた」と、ロマンチックな生垣だ。

常陸風土記の丘を訪ねた時、鹿の子遺跡の復元建物の周囲に植えられたカラタチの生垣が目についた。小雨にうたれ濡れたカラタチの緑が、一層美しく映えていた。カラタチに雨はよく似合う。うっとり見とれてみると「鋭いカラタチの棘など茨が生息する地」から「茨城」という名称ができた、ボランティアガイドさんが教えてくれた。

さて、奈良盆地には東端の青垣の山麓を縫うように続く日本最古の道・「山辺(やまのへ)の道」の他に、盆地のど真ん中を南北にまっすぐ伸びる三本の官道があった。平城京と藤原京を結び、東から順に上ツ道・中ツ道・下ツ道と呼ばれ、4里(2.1km)の等間隔で平行し、幅は28mで長さ約20kmの一級国道だったという。現在は道幅の狭い県道だが、中ツ道は南は橘寺に通じていることから、いつしか「橘街道」と呼ばれるようになった。

最近、大和郡山市のある老舗の和菓子屋さんが呼びかけて、この歴史街道沿いに橘を植樹しようという活動が始まった。将来、生垣などではなく橘の並木が続く道を想像すると、胸がワクワクする。

先日、久しぶりに垂仁陵の辺りを散策してみると、御陵の南や東側の畑に植樹された橘は、冬の日差しを浴びてたくさん実をつけていた。手入れに来ていたボランティアの若者が、実を一つ取ってくれた。私は不老長寿にあやかれることを願って、熟した実をかじってみた。

「……苦ッ！」

おそらく苦虫を噛み潰したような表情だったの

だろう。「良薬は口に苦しですよ」若者の笑い声を背に、私は垂仁陵を後にした。健康な長寿にあやかりたいと願って。

投稿いただいた今井さんは、日本国府めぐりをされている時に、当会の兼平さんが歴史ホランテアとしてご案内した縁での投稿です。小さな縁で、各地に友の輪が広がって行くのは当会としては、大変うれしいことである。

養生日記（詩二編）

堀江実穂

『散歩』

いつもと同じ散歩道
私の心は毎日変わるけど

風景はいつも同じ
幼稚園バスが走り抜ける
小学生達のふざけっこ
犬の散歩をしている人
交通整理をしているおじさん
毎朝同じ場所で行くわす
でも

同じ毎日、同じ場所に見えるようでも毎日少しずつ変化がある

今日は確実に昨日とは違う
それに気付くと毎日の散歩が楽しくなる
歩くのが嬉しくなる

風が私を追い越したり木立の下に止まっていたりする

風が私の心に景をつくってくれる
風はいつも自在に変化する
風に吹かれて私の心も変化する

風に励まされたり唆されたりしながら自分の存在を知ることが出来る
風に背を押されたり強い抵抗をされたりして今日の散歩の目的を作ってくれる

『音遊び』

ポタンポタン 雨音心に染みいる
ヒューヒュー 風音は安らぎ
ピアノがポロンポロン 音楽のシャワー
涙の流れる音
楽しそうな笑いの音
子供達の駆けるクツの音
寛ぎの気分でお茶をすすする音
日の移ろいは音の移ろい

朝目覚め今日の音を確認する
音が生れて一日が始まり
音が消えて一日が終わる
一日は心臓の鼓動を意識することで明ける
心臓の鼓動が意識から消える時一日が終わる
人生も同じ
生きるとは音に遊ぶこと
音に日々の喜怒哀楽を思えなかつたら
それは不幸
目覚めて明日、私の心に吹く音はどんな音

堀江さんの養生日記としての詩を楽しみにされている方がおられると、編集室に声をかけて頂きました。養生日記を投稿いただいても半年ぐらになるだろうか。毎月の投稿をお待ちしております。

《ことば座だより》

次のステップを志向する

白井啓治

ことば座は、聾者である小林幸枝の手話表現の中に、舞台スケール感を見出したことで、ふる里を発信していく新しい表現を構築しようと、当会報「ふるさと風」の創刊に半年遅れで発足したのであった。

ことば座では、小林の持つ手話表現の舞台スケール感を十分に発揮できるように、朗読を主旋律にして物語を手話を基軸にした舞に表現する「朗読手話舞」という新しい舞い&舞踏パフォーマンスを創出し、ギター文化館を発信基地として、常世の国の恋物語百に挑戦している。常世の国の恋物語は、本年6月の定期公演で三十五話になる。

現在、小林の演じる朗読手話舞は、第一段階としての到達点に来ており、今後は更なる独創的表現を目指して、精進を積むこととなる。

ふる里に朗読劇団をという発想は、ふるさと風の会の前身である「ふるさとルネサンスの会」の時に、民話ルネサンス塾に発掘・再生されるふる里物語を発信できる場を作る、にあったのであるが、ルネサンスの会が頓挫したことで先に進めなかつた。

そのため、先ずはこの地から「この地発の新しい表現」を創り上げようということで、小林幸枝の朗読手話舞を主軸にしたことば座を立ち上げることになったのであった。

ことば座を立ち上げ、朗読手話舞を進めてきたのであるが、朗読手話舞という一つのスタイルがある程度確立できて来た事から、その発展とともに少しふる里表現の幅を創ることが必要であろう

と今考えている。

人口の少ない地方にあって、大きな集団での表現を創造することは不可能なことである。小粒であつても確りとした、高い文化度・芸術性を持った表現者を育成し、発信することが重要である。

幸いなことに、当地にはギター文化館という他の地にはない文化施設があり、ここを起点としたふるさと文化の発信者が育ってくれたらと願つてやまない。

クラシックギターのための文化館だからギターだけの場所、と考えてしまうのは余りにも短絡した考えであろう。現に館長である木下氏自身も、もつと幅広く考えて、文化表現の場にしてもらいたいとの考えを持つておられる。

ヨーロッパなどでは、ギターの演奏に詩を吟ずるといふということが古来彼方此方で行われている。地方の小市には、ギター文化館とは願つてもない場所である。ふる里を賛美する詩や物語を素朴な楽器に吟ずることの出来る施設はこの地にかないものである。

ふる里に民話をルネサンスのように始まつたふるさと風の会とことば座であれば、少し演劇バカになつて、ことば座の次なるステップを考えてみたいと思つている。

都会では今、第二の人生の楽しみに朗読教室に通う人が増えているという。知人が教えに行つて居る教室にも、退職した男性の生徒が急増しているという。教室に来て、これまでに考えていた朗読というものに如何に形に嵌められた勝手な思い込であつたかを知つたと言う人が多いという。

朗読とは自分を表現するものです。ギター文化館で自分表現を楽しんでみたいと思われる方、ぜひ

ひ一度連絡して頂けたらと思います。新しい生き甲斐を見出すかもしれません。

《一寸一言・もう一言》

Ⅱ 一寸一言Ⅱ

砂漠の夢

打田昇三

日本で革新系内閣が出来た頃にシリアを訪問した総理大臣が、遺跡を見学し其の荒廃ぶりを嘆いて復興の援助を申し出た。しかし現在の強力的な与党が当時は野党であつたから、イスラエルとの関係もあり親米系でない国への援助が実現する筈は無くトップが約束した話も空手形で終わった。

シリアは国土の九〇%が砂漠であるが古代からシルクロードが貫通しており、其の中心部に於いてオアシス都市から都市国家に発展し、ローマ帝国を相手に戦つたパルミラ王国など貴重な遺跡が残るほか首都・ダマスカスに在る国立博物館は古代オリエント(メソポタミア文明など)関連の展示品で世界最高水準と言われている。

近辺には旧約聖書・創世記に残る「カインとアベルの物語(エデンの恵)」のカシオニ山がダマスカス市街地背後に在り、悪女サロメに斬られた洗礼者ヨハネの首を納める寺院はモスクに変わつても現存している。十二世紀に十字軍からエルサレムを奪還した英雄サラディンも此の地に眠る。

近年のシリアはバース党(アサド父子)の独裁を経て混乱状態にあり、領土の一部が凶悪武装強盗団に占拠されているらしい。「もしも……」の話になるが、あの当時に日本が何らかの形で支援していればシリアも違つていたのか……と思わないでもない。

何よりも一国の総理が嘘をついてはいけなし、そうさせた当時の野党も悪い。首都の名はダマスカスでも……騙すことは許されない。

「所得格差」

菅原茂美

私はまだ読んではいないが、仏経済学者トマ・ピケティ氏の著書「21世紀の資本」が、世界中、売りに売られているという。この本によれば、「富が富を生むスピードが経済成長よりも早く、何もしなければ、格差が拡大する。格差是正のためには、富裕層が持つ資産への課税を強化すべきだ」というものらしい。08年リーマンショック後の景気低迷下で、一握りの大企業や資産家が、富を独占している事への批判が高まった事や、日本でもアベノミクスによる円安の効果が、大企業にとどまり、中小企業や地方には十分及んでいないとする世相から、この本が売れまくっているらしい。現在米国では10%の富豪が富の70%を占めているという。世界のいづこを見ても、富の大部分は一握りの富豪に集まり、一般庶民の懐はちつとも暖かくない。共産主義の国でさえその傾向が強いという。

報道によると、中国では、2月19日が旧正月春節で、昔は民族の大移動と言われるほど、里帰りでごった返していた。しかし、それほど待ち遠しいはずなのに、北京に住む地方出身のワーキングプア層は、動くに動けない「恐帰族」とも言われ、故郷に帰りたくとも帰れない。土産やお年玉にも事欠く。大学を出ても定職を持たず、家賃の安い郊外に集まって秘かに暮らしているとか。世界第2位の経済大国中国は、貧富の格差が深

刻。高所得者の上位20%と低所得者の下位20%の平均所得格差は、10,7倍との事。米国^{8,4}倍、インド^{4,9}倍、ロシア^{4,5}倍。だが最高指導部だった周永康の押収された蓄財は^{1,5}兆円というから、習近平の汚職摘発も手間取ったと見える。日本でも企業の内部留保額は330兆円と聞くが、その何割かは、社員の給料に是非とも回してほしい。

もう一言II

イスラム世界

打田昇三

「イスラム国」を名乗る凶暴な集団がある為に誤解されるが、本来の「イスラム」は違うので、日本で著名な東洋史学の先生が「イスラム」に関する幾つかの本を出されて本来のイスラムの何たるかを説いておられる。私は古代遺跡を探訪する目的で主に中東を旅したが、皮肉なことに著名な遺跡のある国の多くはイスラム国であったから多少の戸惑いを感じながらも其処に暮らす人々の敬虔な姿に接している。現在でも大部分のイスラム教徒は其の様な暮らしをしている筈である。

日本人が主に理解する宗教は仏教・神道・キリスト教、そして誰かが中途半端に作り出した新興宗教であろうけれども、イスラム教も原作者があり構造形態は同じであって、西暦六一〇年頃(日本では小野妹子、聖徳太子?の時代)にアラビア半島の大都市メッカの民族(クライシ族)ハーシム家のムハンマドが、絶対唯一神と信じる神アッラーの啓示を受けて開始した宗教である。

本来の神様は、どの宗教でも共通な筈であり、マホメッドも最初はエルサレムを信仰の対象地に

したが、当時の頑迷な連中から排斥を受けた為にメッカを聖地に変えたいらしい。イスラムは過酷な環境の砂漠地帯で起こったから断食などを義務化したのである。マホメッドの死後、従兄弟のアリーと妻のアイーシャとの後継争いから宗派対立も生じ、それが現代まで尾を引いて紛争や混乱が続く地域もあるが凶暴なテロ集団は論外である。

豚と人の類似点

菅原茂美

誇り高い読者は豚と人に類似点などあるものかと、お怒りになるかも知れないが、どっこい沢山ある。豚の祖先猪も人もモグラなど食虫目から分岐した哺乳類。解剖や生理は実によく似ている。肉食獣の腸管は極めて短いが、草食獣は繊維などを消化するため腸管はとも長い。豚や人はその中間で、雑食動物である。豚は実に綺麗好きなのに人間が勝手に狭い所に押し込めて飼うからやむを得ず体が汚れているだけ。心臓など人とそっくりなので心臓外科医の卵は豚の心臓で手術の訓練を積む。又、実験動物としてミニ豚は貴重な存在。

豚は人への異種臓器移植提供動物でもある。知能は犬より高く、鏡映認知能力は類人猿より高い。嗅覚は犬に劣らず、トリュフ探しの名人。漢字圏で干支の「亥年」は日本以外は「豚年」と言うし、豚の牙は富の象徴で、豚の夢を見ると金が溜ると韓国では豚型の貯金箱が用いられる。

さて、イスラム教で、なぜ豚肉を食べる事を禁じているか? それは、イスラム教徒は元々遊牧民。家畜を連れて回遊する民族である。ラクダ・牛・羊・山羊など反芻獣は真に従順で遊牧に適し

ている。しかし豚は貴重なタンパク資源で、肉も真においしい。ところが、いかんせん決して人の言う事を聞かない。Aが西を向けばBは東。一塊りになつて移動などまず不可能だ。となると、群れを率いるリーダーは、一団を統率できなければ資格がない。そこで頭の良いマホメット(ムハンマド)は、コーランをそつと書きかえ、『誇り高いイスラム民族は、不浄な豚肉など、決して食してはならない! コーランにもしつかり書いてある。』…と称したのが事の始まりだとか。

一寸一言・もう一言の「コーナー」、打田・菅原両氏、気楽にかけよう、編集室ではどれを載せようかと毎月頭を悩ませます。4000字詰め原稿用紙一枚程度なら、とお思いの方は是非投稿ください。(住所氏名・Tel筆名の方は筆名を明記下さい)庭に鶯がやつて来て下手糞に啼いた、などの日々を書いてみるのも楽しいのでは。

【特別企画】

打田昇三の『私本平家物語』

巻第一 (五・一)

タイトルが示しているように、どうでも良い寺院の内輪揉めが最初の章段である。平家物語には無くても良いような話ではあるが、トラブルの解決に平清盛が関わってくる。つまらない話が続くので、そのお詫びとして始めに神仏の裏事情を告白して置くことにする。日本という国は神国と言われながら仏教が盛んになった所為で文化の面で画期的な発展を遂げたことは否定出来ないから神様は伝説の世界に

封じ込められて明治維新まで陽の目を見る事が無かった。明治新政府は世の中を根底から変える為に、国民の頭を仏教から神道に切り替える目的で神話と伊勢神宮と天皇制を活用したのである。そのお蔭で「日本は神国」と錯覚した軍部が日露戦争時代から進歩しない武器で近代兵器を持つ世界中を敵にして負けた。

茨城県に居るから言う訳では無いが、大和朝廷が存続できたのは鹿島神宮(武甕槌命)のお蔭なのである。伊勢神宮祭神の「天照大神」は名前が示すように朝鮮半島から日本列島までの何処か島国で海に潜る「海女族」が信奉していた神様であり、やがて海女族は日本にやって来て伊勢湾に住み着き「海の神」として信仰していた。伊勢の土着豪族が壬申の乱で天武天皇の勝利に貢献したので部族が信奉していた伊勢神宮の株が上がった。

何を馬鹿なこと！とお叱りを受けるかも知れないが「伊勢神宮」に関する記録は壬申の乱(天武天皇勝利)の翌年(六七三)が最初である。戦前の神話的歴史書には伊勢内宮の創建が西暦紀元前五年になっているが、その頃に未だ日本国は無い。

皇統は伊勢神宮系とも言える天武天皇系が孝謙(称徳)天皇で絶えており、平家の祖先である桓武天皇からは本来の天智天皇系に戻っているのであるから、天皇家発祥の歴史から考えれば朝廷が第一に崇拜する神様は、伊勢神宮では無くして草創期の先祖がお世話になった鹿島神宮で無ければならない筈なのだ。神様の世界でも義理人情より権力が幅を利かせるのは悲しいことである。

神様へのクレームは兎も角として、平家物語の原作者が仏教関係者らしいので多少のコマースヤルが入るのは仕方無いけれども「仏盛れば魔盛る」な

どという諺もあり、折角の大著作でも見え見えの仏教宣伝ばかりでは歴史物語の価値を下落せしめかねない。今回の章段は特に其れが多い。釈迦が唱えた仏教本来の教義は「煩惱に悩める大衆の救済？」であって、馬鹿な公家たちの真似をして寺社が権力争をしたり、過大な広告で宗教をPRして儲けたりする事では無いのである。

尤も、釈迦本人でさえも初めのうちは其の教義が大衆には正しく理解して貰えずに、教団は大きくなったが、釈迦の真意を理解する者は少なく、真つ先に釈迦の教えの真髄を会得して一番弟子になったのは北東インドのブアイシャリーという田舎町に住む娼婦アンバパー嬢なのである。

ブアイシャリーという町は世界で最初に共和制をしいたと言われるから、地元の小規模な店の娼婦(当時は公認?)さんでも、現代の出来の悪い政治家よりは考えが立派だったのであろう。

釈迦の最後を看取ったのは田舎の鍛冶屋の息子・チュンダ君であって弟子でも教団の支援者でも無い。その時に単身二百キロ行軍を続けていた釈迦はネパールとの国境に近いクシナガル地区に来て疲れ果て寒村パーブアー村で休息をとった。心優しいチュンダ君は空腹そうな釈迦を見て近くの森から採って来た茸(きのこ)を煮て釈迦に勧めた。ところが、その中に毒茸が混じっていたらしく釈迦は腹痛を起こした。慌てふためくチュンダ君に「最後の食を供したお前には功德が有る」と言い残して釈迦は静かに息を引き取った。そういう格好の良いセリフは凡人に言えるものでは無いが釈迦の命日は現代暦の二月十五日になる。

平家物語には書いてなくても、是は現地に伝わる話であるから真実に近い。人間社会は立場などの違

いで損得の差が大きいけれども、お釈迦様の例に見られるように神仏でさえ全てが順調でも思いどおりでも無かったのであるから、人間社会はその時々々の損得や栄枯盛衰の差が大きいのは仕方が無いと諦めて貰う他は無いです。

そもそも仏教が伝来した際に朝鮮半島では素直に受け入れられたが、日本では神様が存在した、と言うよりも自然環境が厳しい朝鮮半島などから先に来て居た大陸系民族が、日本列島の豊かな四季に驚いて「目に見え無い偉大な存在」として自然現象などを「神」として意識していたから、異国の神である仏教は拒否された。

然も仏教本来の趣旨とは相反する「戦争への勧誘」に際して手土産として「経文」という場違いな品物が持ち込まれたのであるから嫌われるのは当然である。欽明天皇の時代に新羅の圧力に苦しむ百済王の使者が朝鮮半島の危機を阻止する軍隊派遣のお願いに來たのに、選りに選って手土産に持ってきたのがお経なのである。手土産は菓子とか果物とか俗世間的なものが良い。百済王にしてみれば最も貴重なものを贈ったつもりなのであろうが、小難しい経文は煮ても焼いても喰えない。

それでも当時の日本を支配していた大陸系が残る「蘇我王朝」が簡単に騙されて仏教を導入したのである。最初はトラブルも有ったが、文字が無かった日本では信念だけの神様よりも文字で書かれた仏教が普及して文化の広がる原点になった。その為に寺院がエリート階層だと誤解して朝廷や公家が是を甘やかす其処に巣食うゴロツキ僧兵どもが大威張をするようになる。平家物語は其の時代のことであるから腹が立つても御容赦を：「馬鹿につける薬は無いら！」と言われるが、この時代は朝廷から公家から、

さらに其の連中に使われていた武士までが薬のつけられない人種だったと思つて平家物語を読まないとなつてはできない。

山門滅亡 堂衆合戦(さんもんめつぼう どうしゅう うかつせん)のこと

原文では此の出来事が治承元年(一一七七)のよう
に解されるようであるが、実際は翌年のこととされる。その頃には後白河法皇の近臣であつた西光法師や藤原成親らが平清盛に肅清された事件のホトボリも少し冷めて、後白河法皇と平清盛の対立関係も、見かけ上では対立が分らないようになっていた。そして年末近くに高倉天皇の中宮である徳子(清盛の娘)が言仁親王(ことひとしのう)後の安徳天皇を生む前であるから平清盛は勝手に上機嫌で居たのである。

後白河法皇は失敗した平家転覆計画の最高責任者ではあるが、さすがに法皇(出家した前天皇)という立場に居たため平清盛も重盛の諫めもあり逮捕することを保留した。法皇は、是を反省したのか、じつと我慢したのか、力量不足を後悔したのか、惚(とぼ)けたのか、何事も無かつたように三井寺(園城寺)の公頭僧正を導師(師範)として真言宗の秘法伝授を受けていた。公頭僧正は花山源氏(第六十五代・花山天皇の末裔)とされていて安芸権守(広島県副知事)を務めた頭康王の子といわれる。後に天台座主に補される。個人的恨みは無いが歴史として言わせて貰えば花山天皇は「怪しい天皇」として知られた冷泉天皇の子であるから怨霊とは親しかった。その子孫が仏に仕えるのは正に適職である。それも密教を得意とする真言宗の僧であれば尚更に靈験あらたかな、悪く言えば秘密主義で何をしているのか分からない世界である。後白河法皇は大日経、金剛頂教、蘇悉地経

と云うお経について公頭僧正から教えを受けて治承二年(一一七八)の秋に卒業証書を貰つたのである。国民にとつては全く為にもならない無駄なことである。

その卒業式と云うか、インドで起こつた仏教儀式の灌頂(かんちょう・かんじょう)を九月四日に三井寺で行うことにしたのである。これは特に密教で菩薩の階級が上がる際に行われた儀式だそう、頭に水を注ぐらしいから本来は消防署の管轄である。灌頂でも流腸でも下痢をしない程度に好きなように好きな病院ですれば良いのだが当時の僧兵たちは寺院の寄生虫のような存在なので、仕事を取られた比叡山の僧兵たちが怒り出したのである。多分、お布施の予定額が大きかつたのであろう。正につける薬が無い連中である。

三井寺は滋賀県大津市にある、現在は天台宗寺門派の総本山である。皇位継承で天武天皇に敗れた大友皇子の創建と伝えられる寺であるが、すぐ近くに「山門」と呼ばれる天台宗の総本山・比叡山延暦寺があり、喧嘩別れで分離した寺であるから両者の仲も良くない。揉めて当然なのである。

現代は檀家が菩提寺を選べる世の中になつたが平安時代の事であるから比叡山延暦寺の僧たちは「昔から皇室の関係者が灌頂や受戒(灌頂を受ける前の予備儀式)を当山で受けられることは先例となつてゐる。特に山王権現が人々を教化される御利益は心ある者が承知をしている。それなのに後白河法皇が三井寺を選ばれたことは納得がいかない。もし是が実現したらば(報復措置として)三井寺を焼き払うであらう…」と宣言をした。

呆れ果てた暴言ではあるが、後白河法皇も争いは無益であると判断して、一応は準備作業だけして置

いて三井寺行きを中止した。それでも黙つて引つ込むのは悔しいので、先に述べたように三井寺の公頭僧正を呼び寄せて一緒に大阪の天王寺へ行つて、先ず大日如来(真言密教の本尊)を安置する五智光院の建立を決め、それから境内にある亀井の水を灌頂用の水として少し香水を入れた。三井寺に変えて其処で灌頂を済ませたのである。

灌頂でも流腸でも済んだ後はスッキリする。国民には関係も無い無駄な行事は是で万事解決したので世の中は落ち着いてくる予定なのであるが、タイトルに「山門滅亡・堂衆合戦」とあるから無事では済まない―済ませられない。

偉い坊さんは別にして「山門」こと比叡山延暦寺にゴキブリのように住みついていただけの連中は大別して「学生」がくしょう・髪を剃り仏門に入った形をとる法師」と「堂衆」どうじゅ・雑役に従事した下級の法師」とに分かれていた。身分的には堂衆が学生の下位に付く形であつて未成年者が多かつたけれども、仏法を学んで学生に負けない理論を持つような者が増えてくると、両者の力関係が対等になり対立が起こつてくる。

平家物語原本には「堂衆と申すは、学生の所従なりける…」と書いてあるだけで、最初から学生の味方をしてゐるが、源平盛衰記では越中国にある比叡山の末寺で領地争いがあり、それに学生と堂衆が絡んで対立が深まつた経緯が記してある。バカバカしいから細部は省略するが、何れにしても坊主頭の僧侶同志の喧嘩であるから「どちらも毛が(怪我)無くて良かった…」と納得すれば良いのだが、寺院の喧嘩だけに是が「大袈裟」になつて比叡山が戦場になり学生が大敗したらしい。

「山門の滅亡、朝家(朝廷)国家の御大事と見えし

…と平家物語は書いているが、一寺院が滅びただけでダメになるよう国家ならサッサと滅びた方が良い。堂衆たちは、比叡山延暦寺の東塔に置かれた金剛寿院の座主である覚尋権僧正(権大納言・藤原道頼の孫に当たる左馬頭・忠経の子)の在任中は比叡山を構成する東塔・西塔・横川の各塔に交代勤務をしていたのであるが、旧暦四月十六日から七月十五日まで(当時の夏の期間)は外に出ず静かな場所でも過ごし、仏に花を供え修行をする慣習であった。その様に最初は堂衆が目立つことは無かったのだが、近年は行人(ぎょうにん)修行に重点を置くこと称して、学問に偏る学生の風下に甘んじることをしなくなった。

そして遂には学生と堂衆とが武器を以て戦うことになったのだが、単純に考えても学問中心のグループが、下積みの長い堂衆軍に叶う筈が無い。何度、戦っても勝てない。これで諦めれば良いのだが弱くてもプライドだけは強いから、卑怯にも公家に訴えて政府機関を味方に着けようとした。

「堂衆が先輩や上司の命令を聞かずに乱暴狼藉を繰り返している!」と討伐を要請したのである。

訴えを受けた政府(と言っても能無し公家の集まりであるが)は正直なところ、どうして良いか分からない。これは武士の担当で有ろうとして問題解決を平清盛に押しつけてきた。権力を握っていても組織の中で「武門担当」となっている平家であるから、天皇なり法皇なりが公式の命令書を出した場合には従わなくてはならない。此の場合は高倉天皇が小学校へ行っていたので後白河法皇が命令書を発行した。法皇は、側近を何人も清盛に消されているから「都の仇を比叡山で討つ」つもりで命令書を力強く書いて清盛に送った。

公式な命令であるから辞退は出来ない。清盛は紀

伊国有田郡の豪族である湯浅権守宗重に命じて京都周辺諸国から挑発した兵、二千余を指揮させ堂衆退治に向かわせた。自分の部下を使わないところは平清盛らも、法皇に負けず考えている。

討伐される側の堂衆は比叡山西塔の東陽坊という場所を本拠にしていたのだが、追討軍が来るというので近江国三ヶの庄(琵琶湖畔、現在の琵琶湖大橋から十キロほど北)という閑所のような場所に移動し、各所に散っていた兵力を結集してから比叡山の早尾坂(そういさか)に城構えを築いて官軍を防ぐことにした。

治承二年(一一七二)九月二十日の朝、出勤時間に合わせて比叡山の学生ら(堂衆以外の僧兵約三千人が、平清盛の命令で出動した官軍二千余騎と合流してから堂衆の立て籠る早尾坂に押し寄せた。合計五千余の大軍勢になる。

それに対して、三千しかない堂衆たちが護るのは「城」とは名ばかりの延暦寺の一角に過ぎないのである。五千の兵力で一気に攻め寄せれば容易に落すことが出来る筈なのだが、官軍二千と延暦寺僧兵の三千がお互いを尊敬して先陣を譲り合った…と言えは聞こえはいいが、実はどちらも無責任な集団であるから攻めるのを嫌がってグズグズしていたのである。堂衆軍は其処を狙って上から石を落とし、一斉に矢で射たから攻撃側に多数の死傷者が出た。五千が三千に負けたのである。

堂衆側には悪党と呼ばれた山賊、海賊の仲間や地方で悪事を重ねていた連中が加わっていたので欲が深く命知らずが多かった…と原本にあるが是は負け惜しみである。平清盛が派遣した官軍を含む堂衆追討軍は完全に敗北したのである。近臣を清盛に殺された後白河法皇が密かに溜飲を下げた(内心で喜んだ…と考えられないこともない。

山門滅亡(さんもんめつぼう)のこと

前章段で既に「山門滅亡」を付けているのであるから気の短い人には「しつこい!」と怒られそうなたイトルである。専門の先生方は「この章段は語り物の拍子づけのようなもの:」と見ておられるようで、言わば比叡山延暦寺が僧兵対僧兵の喧嘩で荒廃して滅亡した―その恥さらしを隠すための条文なのかも知れない。その所為か此の章段は、庶民にはどうでも良いような仏教用語を多用して誤魔化している。条文全部を省略しても物語の筋には影響しないような内容であるが、原作者の僧侶が苦勞をして書いたようなので、分かり難い出来る限りは忠実に書いて置く。

山門滅亡の原因となった僧兵同志の戦いについては平家物語よりも源平盛衰記に詳しく書かれており、其れに依れば仏に仕える者同士の間合戦とは思えないほど激しい戦であったらしい。戦場と化した比叡山延暦寺は荒れ果てて、伝統的に西塔の法華三昧(さんまい)堂で昼夜を分かたず十二時(刻)を一刻ずつ交代で経を読む(不断経を修する)十二人の僧のほかは延暦寺山内に住み留まる僧も少なくなってしまった。谷々に置かれた修行の場所で行われていた仏法の講義や説法も廃れ、座禅の修行も中断して真面目に仏法を学ぼうとしていた僧も居なくなつたのである。

何よりも「四教五時」として伝えられた釈迦一代の教法、教義内容が説法として行われなくなり依り天台の教理である「三諦即是(さんだいいそくぜ)空(くう)・仮(か)・中の三真理は一体で真実不変だとするもの」も曇つた秋の月のようになつてしまった。つまり長い年月に亘つて仏教界を照らし続けてきた天台宗の教理が宙に浮いてしまったのである。現代

ならば宗教は腐るほどあるから、どうと言うことは無いのだが、伝わった宗派も多くないし、何よりも当時は仏教界を牛耳っていた天台宗の本山が破産したので大騒ぎになったのであろう。

其の頃は宗教的感覚で「末世」と思われていたのだが、その思想からすると末代の俗世間では、インド・中国・日本に伝わって来た仏法は次第に衰微してしまっていることになる。遠くインドの仏跡を訪ねてみても、かつて釈迦が仏法を説いて回られた竹林精舎（ちくりんしようじや）仏教教団最初の寺院・仏典結集の事業が行われた場所）や給孤独園（ぎつこどくおん）平家物語最初に出てくる祇園精舎のこと）も此の頃は虎、狼、狐などの棲家になって建造物の基礎だけしか残らない有り様であった。虎、狼は危険だが、当時から千年近く経った現代でも釈迦誕生の地ルンビニ遺跡（ネパール）などでは夜になるとホテルの周辺にジャッカル（小型狼）が出没する。宿泊客は襲われないらしいから心配は無いが、日本とは棲む動物の種類が違うのであるけれども、聖地が荒れ果てたということであろう。

祇園精舎に隣接する王舎城の竹林園に在った白鷺池は、水が無くなって（手入れをしないから）草ばかりが生い茂り、釈迦が霊鷲山（山岳修行の地）を下りてから最初に説法をした際に、地元のビンビサーラ王が記念に建てたという二つの卒都婆（この場合は立て札）も苔が生えて傾いた状態になり荒れ果てている。

この二つの卒都婆と言うのは、山を降りて来た釈迦に聖なるものを感じて道を説くことを懇願したビンビサーラ王（マガダ国王）が建てた仏法の妨げになる者を否定する「退凡」仏教を理解出来ない凡人は去れ！」・「下乗」王者と言えども此処は車から降りよ！」という二つの掲示板をいう。余計なことだが、

此の王様は息子に背かれて牢獄に投ぜられ不慮の死を遂げた。仏法受け入れを巡る親子の確執が有ったのかも知れない。

釈迦の故国であるインドが其の様な状況なのであるから、さらに仏教が最初に伝わった震旦（しんだん）中国でも天台山、五台山、白馬寺（中国最初の寺院）や玉泉寺（天台開祖の智顛ちぎが建てた寺）など由緒ある寺さえも今は（平家物語が書かれた頃は）住職も居無くなり、荒れ果てている。仏教に言う大乘（一切の衆生を現世の苦悩から解放する）と、小乗（自己の煩悩を去る）の教えは、悲しいことに、両方とも仏教と言う箱の中で朽ちてしまったことになる。

仏教の本場・中国が其の様な有り様であるから日本でも南都（奈良）の七大寺（東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、薬師寺、西大寺、法隆寺）も荒れ果てており、当時の日本に広まっていた仏教の八宗九宗（俱舍宗、成実宗、律宗、法相宗、三論宗、華嚴宗、天台宗、真言宗の八宗に禪宗を加えて八宗九宗と呼ばれていた）も跡を絶えて、京都嵯峨に置かれた愛宕権現と右京区の高尾山神護寺のように、名所として賑わっていた場所さえも次第に寂しくなってしまうのである。平家物語の原文に「一夜にして荒れ果て天狗の棲（すみか）となった」と書いてあるが、大地震や津波、台風では無いので嘘も程々に修正した。

其の様なことで、権威や高貴を誇っていた天台宗の仏法でも今に及んで滅びることになったのである。心有る人々は嘆き悲しんでいた。誰かは分からないが、比叡山を去って行った僧侶の一人が、焼け残った僧坊の柱に次のような一首の歌を書き遺していった。

「祈り来し我が立つ杵（そま）の引き変えて
人無き峯となりや果てなむ」

（そま＝木材を切りだす山、此の場合は賑わっていた当時の比叡山を想定している）

この僧侶は、伝教大師（最澄）が比叡山を開山して阿耨多羅三藐三菩提（あのかたらさんみやくさんぼだい）の上なく優れた仏たちに祈られたことを思い出して此の歌を詠んだのであろう。その心情は美しいものである。

また八日は薬師の日（薬師如来の縁日）であるけれども然るべき寺院に行っても「南無」と唱える声は聞こえず、陰曆四月は「垂迹（すいじゃく）の月」と言つて中の申の日に薬師如来が衆生（大衆）を救済する為に山王権現となって日本に来た日とされているが、神前に幣帛を捧げる者も居ない。その為に玉墻（たまがき＝神社の垣根）つまり神域も寂しくなって、注連縄（しめなわ）だけが残されている。

これらの文は「本地垂迹説」仏が衆生救済のために神に姿を変えて現れた」とする説に基づく記述である。平家物語が書かれた頃は既に「鎌倉時代」に入っており完全に武士の時代になっていたので、平安時代までのように神仏を異次元で書くことはしなかつたのであろうか？

此の章段は特に語り物の本来である説教用台本色が濃い話であるから、宗教丸出しで難解な、そして庶民にはどうでも良いと思われるような内容である。「さすがに坊さんが書いただけのことにはある」と感心して、直ぐ忘れるしかない。

善光寺炎上（ぜんこうじえんじょう）のこと

此の章段も平家とは関わりが無い寺院の話であり然も童話のような幼稚な嘘で固められている。飛ばしても良いような内容であるが極めて短いから冗談話として書いておく。前の章段の付け足しのような

ものである。ただし最後に平家の衰退と善光寺を結び付けているが、これは「こじつけ」であり火事を出したのは善光寺の責任である。

その頃、長野市にある善光寺が焼けた、という話が都に伝わって来た。実際に火災に遭ったようので、焼けたのは治承三年（一一七九）三月二十四日と記録されている。実は其の約四か月後に平重盛が四十代で病死しているから、無理に言えば平家と何らかの因縁があったことにはなる。

此処に納められていた如来像は、その昔、天竺（てんじく＝インド）の舍衛国（しゃえいこく＝祇園精舎の近くにあったマヘトを中心とした国）に五種類の悪病が流行して多くの民が亡くなった時に、毘舍離国（ひしゃりこく）を統治していた五百人の長者の首長である月蓋（がつかい）長者の要請によって、須弥山（しゆみせん＝仏教世界の中心に立つとされる山の南方海上にある大陸で採れた砂金（閻浮檀金＝えんぷだんこん）を用いて鑄造された如来像である。

その砂金は浦島太郎で知られた竜宮城から輸入したものでらしい。関税が掛けられたかどうかは記録が無い。その砂金を使って釈尊（お釈迦様）と弟子の目連と月蓋長者とが共同作業で造り上げたもので大きさが手の親指と中指を広げた長さの一、五倍という阿弥陀如来と、脇侍の観世音菩薩及び勢至菩薩の三尊像である。これは砂金が採れた霊場・閻浮提第一の霊像とされた。

その尊い像が釈迦の滅度（死亡）の後、天竺に留まると五百余年（インドで造られた像であるからインドに置かれたのは当然のことであるが）「仏法東漸（ぶつぽうとうぜん＝仏教はインドから東に広がった）」の理で古代朝鮮の百済国に移り一千年の後に斉明王の時代、先に述べたように日本の欽明天皇の時代に「手土産」として日

本に渡ってきた。しかし、其の頃に疫病が流行した為に物部氏により難波の堀に捨てられてしまった。

疫病は朝鮮半島から来た人間が伝染させたもので仏像の所為では無いのだが、仏像も運が悪いと無実の罪を着せられる。難波の堀の中で暫くの間は我慢をしていたが、或る日、水戸黄門のように「もう良いでしょう！」と金色に光を放ち「SOS」を発したのである。それを見つけたのが信濃国の下伊那に住む麻績（おのみ）の本太善光という者であり所用で都に上っていた。

原本には本太善光が仏像を発見する際のことを「…これによって年号を金光と号す。同三年三月上旬に（本太善光が都に登った）」と書いてあるが欽明天皇の三年（五四三）は、どういう理由か歴史書の記録が無い。仏像にも都合があると思うので深く追求せず話を進める。

既に述べたように其れ程大きくは無い仏像らしいが金属で出来ているのであろうから重い。昼間は本太善光が仏像を背負って歩いたのだが夜になると、どういう仕掛けなのか仏像が大きくなって逆に善光を背負ってくれた。その様にして信濃国へ連れて来られた如来像は長野市近くの水内郡に安置されてから五百八十余年（平清盛時代まで）が経った。その間に大火災に遭った例は無く今回が初めてである。火事が頻繁に起こったのでは堪らないが、灯火を多く使う寺院で五百余年も大火事にならなかったのは珍しいことなのか…。

此の度は火災が発生して、原本には「炎上の例はこれ始めとぞ承る…」と書かれているからボヤや半焼では済まなかったのである。通常は責任問題が起きてくるのだが、神社仏閣の場合は「神仏の怒り（祟り）」という便利な言葉があった。此の場合も「仏法

の衰え」ということにしたらしく、原本では「王法尽きんとては“ 仏法先ず亡ず ”と言えり。さればにや、さしもやんごとなかりつる霊寺・霊山の多く滅び失せぬるは、平家の末になりぬる先表（せんびょう＝前触れ）やらん」…。つまり天下を束ねる権力が衰退する前には、その兆候が神社仏閣に現れる。延暦寺を始め由緒ある寺院が寂れたり、今回の様に善光寺が焼けたりするのは権力を誇っていた平家の没落を意味する…ということらしいが、冒頭に述べたように、善光寺はもとより寺院などの火災は、其処に住んで居る僧侶たちの火の不始末なのである。

＝続く＝

《ぶ》の《り》

アレンジ蕎麦・蕎麦会席料理のお店です。

（ギター文化館通り）

看板娘（大）「つらじ」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話0209-24-0000

※107号は4月4日発行予定です。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

2015年 ことば座公演のご案内

4月19日(日曜日)東京都立川市 イベントハウス ラララ 手話舞公演

朗読手話舞「風に吹かれて・万葉集他」 朗読:白井啓治 手話舞:小林幸枝
開場13:30 開演14:00 入場料2000円

6月20日(土)・21日(日)ことば座定期公演(ギター文化館)

常世の国の恋物語第35話「緋桜怨節」 朗読:白井啓治 手話劇&手話舞:小林幸枝
札幌つむぎびと・熊谷敬子の朗読
開場14:30 開演15:00 入場料2000円

8月9日(日曜日)ギター文化館 2015年コンサートシリーズ「里山と風の声コンサート」

終戦70周年記念イベント 第一部 映画『ひろしま』を観る会
(一回目上映 10:00 二回目上映 12:30)
第二部 詩の朗読とギターコンサート (15:00~)
詩の朗読:白井啓治 ギター演奏:亀岡三典
映画「ひろしま」のみの観賞:前売券1000円 当日券1200円
映画鑑賞とコンサート:前売券3500円 当日券4000円

※映画「ひろしま」は、被爆した子供達の日記を教育学者・長田新が編集した文集「原爆の子～広島の子の少女のうたえ」を日本教職員組合が映画化を企画し、八木保太郎が脚本に書き下ろし、関川秀雄が監督した作品である。この映画の撮影は、未だ原爆の傷跡の深く残る1953年に、広島市民9万人がエキストラ出演や制作に協力し完成にこぎつけた。しかし、当時の時代背景の中で、国際映画賞を受賞しながらも劇場での一般公開は出来なかった。広島、長崎への原爆投下から70周年を迎える。いまだ世界から戦争をなくすことが出来ない現実を、映画「ひろしま」を観ることで改めて考えることが必要ではないだろうか。

ふるさと風の会分科会

風の言葉絵同好会参加者募集

全てが自由で自在であれ、のふるさと風の会から生まれた、兼平智恵子の風の言葉絵。

この新しい自分表現の「風の言葉絵」を楽しむサークルでは、一緒に言葉と絵を楽しむ参加者を募集しています。

詳しくは、兼平智恵子(☎ 0299-26-7178)へお問い合わせください。